資 料

中国溶接学会との接触*

大 西 巖**

Contact With the China Institute of Welding *

By Iwao Onishi**

昨年末、日中貿易促進のための友好視察団に加って中国各地を見学し、中国溶接学会と接触する機会を得た。日中友好協会、貿易促進会などから予め私の渡航について先方へ連絡がしてあったためであろう、北京においてはすでに講演会ならびに懇談会の計画が樹てられていた。12月5日午後1時30分から北京新僑ホテル3階で私の溶接講演会が開かれ、同時に中国溶接学会副理事長・孫魯先生始め、重立ったメンバーによる心こもった歓迎、懇談の夕食会を開いて頂いた。当日は再び午後6時過ぎから質疑応答に移り、午後9時なお心を残しつつ散会した。

中国溶接学会の本部は現在の所、北京市三里河、中国機械工程学会内に置かれており、刊行誌は年2回となっているが、日本の溶接技術、溶接研究には深い関心が持たれている。日本の溶接学会誌と日本溶接協会の機関誌は当地においても入手し得る様子であり、刊行図書などにより岡田博士その他日本の多くの溶接研究者の氏名とその研究内容などが知られていた。私は本年1月号から毎月溶接学会誌を溶接学会にお送りする約束をした。中国溶接学会の高度発展にはあまり歳月を要しないと見受けられるにつき、いずれそのうちには先方からも学会刊行物が日本の学会へ送られることと期待している。両国の溶接が彼我技術交流のかけ橋となれば幸甚である。

次に12月13日、上海の中国科学技術協会において9時から12時まで講演を行ない、立派な昼食会を開いて頂き、午後2時から6時まで質疑応答を行なった。上海のメンバーは同市南昌路47号にある上海機械工程学会にある溶接組が中心であり、当日は陳利華先生ほか数名の幹部および計30名の専門研究家が集合され、熱心に聴講と討論が行なわれた。これとは別に12月11日、日本工業展覧会の開かれている上海の日ソ友好会館別室において午前、午後にわたり、私を中心として溶接の技術交流会が開催された。一般に中国の溶接研究者、技術者たちの知識欲はきわめて旺盛であり、その熱心さには頭の下がる

思いがする。いかなる小さなことでも見逃がさず国家建設に寄与せんとする熱意はがめつき貧欲さとしてあらわれ、その雰囲気には一種異様なものを感じられた。トップレベルの研究者には会話こそできないが、日本語を解し得る人がかなりあるらしく、日本語研究熱が2年程前から著しく高まっている。1960年の夏ソ連がイデオロギーの問題から中国にあった自国全技術者の一斉引揚げを命じて以来、中国技術者は惨憺たる苦心を払いしたが、結局彼ら自身の手で総てを完結し、却って多くの技術を自身の手握ることを得た。日本語研究熱の高揚はこのあたりにも多少とも原因があったのではなかろうか。いずれにしても両国の学者、専門家がお互に気がねなく容易に往来し、大学での講義なども交互に行ない得る日の1日も早いことを望んでいるのは私だけでなかった。お会いした各位もまったく同じ希望に燃えており、日本の学会講演会にも出席できる日を夢にえがいている様子である。日本の研究者あるいは会社が研究報告その他の文献を海外に送られる場合、北京、上海の溶接学会へもお送り願えば先方の喜びはきわめて大きいと確信する。日中貿易の促進にも誠意と相互理解による心の通いが必要であろう。

最後に参考のため、前後3回の講演会を通じての質問事項を思い出すままに列記しておくが、材質的にはステンレスが多く、ハイテンに関するものはほとんどが見かけられなかったと記憶している。

1. 日本の溶接の歴史と現況
2. 溶接学会の活動状況と外国学会との関係
3. 溶接自動化の実情
4. 電子ビーム溶接の実用化程度
5. スラグ溶接の応用事例
6. ステンレス鋼を表面2層で溶接した場合、表面(最初の溶接)二番部の鋭い腐食原因
7. 0.030%炭素のステンレスと普通炭素量でNbなどで安定化したステンレス鋼との優劣詳細
8. オーステナイト中の少量のフェライトの簡単な測定方法
9. オーステナイト溶接棒の偏心測定方法
10. 弗化物を被覆剤として配合することの是非
11. 低水素型溶接棒被覆剤ならびに水素量の問題

* 原稿受付 昭和39年3月2日

** 正 員 大阪大学工学部 Member, Faculty of Engineering
Osaka University